優秀賞

夏の、

北海道函館中部高等学校2年
酒井（さかい）　ちひろ

脳の約八十％は水が占めているらしい。わたしの体の半分と少しも水でできていて、母親の腹の中でこどもを包むあたたかい水は、こどもが初めて口に含むものであるという。図書館の片隅で、埃を被った古い本の、何回も開いて癖が付いたページ。隣には背中を丸めて目をつぶった胎児の挿し絵。頬杖をついて眺める。

うらやましいな、と思った。あたたかく、ほの暗い場所で、一人ぼっちなことも、それでいて、誰かと確実に繋がっていることも。胎児がもつ、肉でできた目に見えるつながりでさえ。

つながり。今のわたしが一番欲しいもの。目を閉じて考える。

この頃感じる、まるでこの世界に一人ぼっちとでも言うような気持ち、酷い孤独感が、わたしの心を強く縛っていた。何が原因でとか、いつからとか、はっきりとしたことは一切わからない。ただただ、辛く、さみしい。毎日毎日無機質なアラームに起こされて、学校が急に無くなってないかな、なんて思いながら歯を磨く。わたしには辛すぎるミントの歯磨きを添えて。

誰かにいじめられているわけでもない。親しい友人はいるし、それなりに恵まれた高校生活を送っていると、自分でも思う。趣味のことをしているときは楽しいし、笑うときは笑う。そうして、独りになった時、どっと寂しさが押し寄せてくる。ならば、と足りないぶんを何かで埋めようとしたこともある。だけど、何もかもが続かないのだ。まるで宙にぶらんと浮いているようで、引っかかりのないわたしの心を、さらりとすべてが撫でていく。

それ以上考えたくなくて、忘れたくて、意識を本へと戻す。でもやっぱり駄目で、いくら読んでも文字が頭に入ってこない。仕方ない、とわたしは膝の上のスクールバッグをぎゅっと抱きしめ、頭を預ける。かたく目を瞑ってみたものの、学校の匂いが染み付いたそれは、わたしの心をなぐさめることができなかった。得体のしれない、この溢れそうな感情を、どうにかしたかったのに。鼻がつんとした。疲れてるのだとは思う。でもわたしはそれ以上、自分のもっと深いところまでが駄目になっている気がした。もうやめにしたかった。

そのとき、不意に耳鳴りがして、それとともにあるひとの声が聞こえた。今ではもう、絶対に聞こえるはずのないひとの声が。驚いて辺りを窺うもそのひとはおろか、人一人さえいなかった。少し不審に思い、スマートフォンを二回タップする。表示された時刻を見て、わたしは慌てて本を閉じ、閉館時刻三分前に急いで席を立った。

バス停へと急ぐ途中、どんよりとした空模様が目に留

まった。雲の多い空で、こんな酷い日じゃおちおち死ねないと、わたしは一人呟いた。

バスの乗客はわたし、帽子を被ったおじいさん、それと仕事帰りの会社員らしき男性の三人だけだった。後ろから二番目、入り口と反対方向の座席に座る。こめかみを窓ガラスにくっつけ、バスの揺れを感じるのがわたしは好きだった。

今日もいつものように、窓ガラスに体を預ける。ひんやりとしていて、心地よい。反射して映るつまらなそうな顔をしたわたしから視線を外し、奥の方を眺める。バスの外、流れるネオンのきらめきはいつだって変わらない。ぼうっと見てみると、これが案外面白い。わたしに見られているとも知らない親子、貸切のようで混み合っている居酒屋、洗濯機が一つだけ稼働している無人のコインランドリー。ほかにも、弁当屋の待合所に、実に多種多様な人々がいるのが見ていて愉快であったりするなど、街の観察は大変面白い。毎日見ても飽きないし、普通の人が知らないようなことを知りたい、というような少し不健全な欲求をも満たすことができるから、ずっとこんなくだらないことをしていたい、と思う。ではわたしはどうするべきなのか。探偵のアルバイト？　それとも興信所に勤める？　そのどれもは現実的ではない。

楽に楽しく生きていきたいと、強く思う。極端に努力が苦手なわたしにとって、大学受験は刻一刻と迫る死へのカウントダウンだ。ずっとずっと、子供のままでいたい。わたしは大人になりたいわけじゃないのに、周りの人はもうわたしを大人として扱う。だからといってわたしの心にしっかりとした大人の感情のパッケージがあるわけでもない。そのことが非常に鬱陶しかった。

大人になんか、なりたくない。なってやるものか、とすら思っている。ただの反抗期中の高校生の戯言だと言わないで、わたしの主張を聞いてくれる人は一体どれぐらいいるのだろう。いつもムスッとしたわたしのことを気にかけてくれる人なんて、そうそういないだろうけど。

そんなわたしに比べてあのひと――わたしの夏のひと――は、いつでも楽しそうだった。にこにこと笑って、あたたかく、日だまりのような、そんなひと。いつも茶色くなった文庫本を持っていて、さらりと羽織ったコットンの白いカーディガンがよく似合っていた。その人と出会う季節はいつも夏だったのに、わたしはそのひとのことを春夏秋冬、いつでも思って忘れることはない。

どんな人なのか、友人に聞かれたことがある。

夢のような人だった。

夢のようにきれいで、夢のように、儚い。
そのひとは今、冷たい土の中にいる。

いとこの子曰く、自分はお母さんのお腹に居た時の記憶があるのだという。あたたかく、赤くて狭かったそう。今もその子は狭いところや心地よい揺れを感じる場所が好きで、乗り物、特に自動車や、押入れの中で過ごすのが好きらしい。くふくふと笑いながら喋るその姿は、たしかにその記憶があるように思われた。

子どもの言うことは、たとえ真偽が不確かであっても、とりあえず信じてみたいと思う。彼らにとって、そのことは紛れもない真実であるから。大人に信じられないというのは、子どもにはなかなか堪えるものだ。昔のわたしがそうであったように。

幼いわたしは、大人に見えないいろいろなものが、周りの子よりも少しだけ多く見えていた。特にリアリスト寄りのわたしの母は、それらをすべて嘘であると言った。

わたしは胎内記憶について少し懐疑的な立場にいる。それでもわたしは思う。母のめぐる血潮の赤さを、わたしはいつまで覚えていたのだろうか。それとも、はじめての白熱電球の眩しさにくらんで、綺麗さっぱり忘れてしまったのか、と。

何もかも、覚えていない。それでもやはり、羨ましいと思った。

こんなとりとめのない話は、誰かに共有することもできない。自分が否定されるのが怖いから。そんなとき、わたしはあのひとを思い出す。がたんと揺れたバスの勢いそのままに、わたしはそのひとに思いを馳せた。

そのひととわたしの関係は、正確に言うと叔母と姪の関係だった。初めて会った時、年の若い彼女を叔母さんと呼ぶのはなんだか忍びなくて、顔を紅潮させながら名前を聞いた記憶が蘇る。

若くて、きれいな人だった。初めて会った時、子どもが好きと言っていた。不健康に痩せている人だった。今までずっと病院に入院していたのを、やっと最近家に帰ってきたらしかった。普段はずっと、わたしのおばあちゃんの家にいるらしかった。

彼女はわたしとする会話を楽しんでいた、ように思う。文がつっかえても、内容がごちゃごちゃであっても、うんうんと頷いていたらしい。あんたと話すのを楽しそうにしてたよ、とは母の談。

わたしは変にどきどきしながら、いろいろなことを話し

た。例えば、夏休みがようやく始まったこと、海苔巻きが好きなこと、勉強が楽しくないこと。夏休みの予定がなくて暇であることも話した。すると、

「もしよかったら、わたしとお友達になってくれない？夏休みが暇なら、毎日おいでよ」

差し出されたしろい手と魅力的な提案を、わたしはすぐに受け入れた。握ったその手が意外にひんやりしていて、わたしが両手で温めるのを、そのひとはおかしそうに笑っていた。

おばあちゃんの家は我が家からそれほど遠くない、少し奥まった高いところにあった。

両親が家を出るタイミングでわたしも一緒に家を出て、宿題を入れたリュックサックを背負いながら緩やかな坂を登る。家に通い出したときは少し坂を登っただけで息を切らしてしまっていたのに、夏休みも終盤となるとすいすい坂を登ることができるようになった。嬉しくて、おばあちゃんの家に着いてすぐそのことを話すと、彼女はまるで自分のことのように喜んでくれた。曰く「自分の成長に自分で気づけることが大事」と。こんなふうな、たったひと夏の間にもらった言葉の数々を、わたしは今でも覚えている。

おばあちゃんの家に着くと、大抵おばあちゃんはもう家にいなくて、代わりにあのひとが出迎えてくれた。手洗いうがいを済ませて、居間に向かう。午前中の涼しい時間に宿題をすること——わたし達が最初に決めた夏休みのルールの一つだった。わたしは宿題のドリルを広げる。いつかあのひとに宿題が簡単すぎてつまらないと零したことがある。分かりきったことを延々と聞かれることにうんざりしている、と。彼女はいくつかの単純な言葉でわたしを慰めた。勉強が得意なのはいいこと、といったような具合で。それを聞いたわたしは不思議と、なぜか彼女に失望したような気がした。ありきたり、陳腐な答えだったから？　それとも、彼女は他の大人たちと変わらないと思ったから？

こんなふうに、彼女と過ごす時いつでも夢見心地というわけではなかった。なんなら、彼女の優しさに触れて、そのぶんわたし自身の冷たさがよりはっきりとして感じられたことのほうが多かった。だが、そうであってもわたしはそのひとのことを特別に思っていた。わたしは子供らしくない子供だっただろうに、それでもあのひとはわたしのことを慈しんでくれた。初めて夏休みが終わらなければいいと思った。そんな思いも凡人になった今のわたしからすると、遠い過去の話である。

彼女が何やら重大な、深刻な問題を抱えていると知るにはそう時間はかからなかった。数日に一度、決まったひとが家に尋ねてくる。そうすると彼女はわたしに申し訳なさそうな顔をして、その人と二人で話を始める。わたしは隣の部屋でじっとする。暇であったが、それ以上にわたしは彼女のことが心配だった。断片的に聞こえる話はどれもわたしの不安を煽った。当時のわたしが認識できたのは、長いカタカナの薬っぽい名前とか、在宅とか家の中でとか、そのくらいだった。

帰ってきたおばあちゃんにそれとなく聞いてみたことがある。あのひとは何処か具合が悪いのか、と。おばあちゃんはさっと目を伏せ、暫く考えるような素振りを見せた。それから、本人に聞いてみてと言った。考えうる限り最悪の選択を、彼女は選んでしまった。がっかりして、そのぶんあの人のことを好きになった。昔はそれでおしまいだったけど、今となってはこう思う。わたしがもしおばあちゃんの立場なら、どうしていただろうかと。親であったなら、一体何を言ったのだろうと。きっとわたしの心の弱さによって、あの人を傷つけてしまうだろうという、漠然とした予感がする。

チャンスはその後すぐに訪れた。いつもの人を二人で見送った後、わたしは恐る恐る彼女に尋ねた。どこか具合が悪いの、というわたしの問いに対し、彼女は否定も肯定もしなかった。ただ、わたしに対する謝罪があった。心配にさせてごめんねと。謝ってほしかったわけではないのに、わたしはなぜだか無性に泣きたくなった。この頃のわたしには、この出来事を受け止めるだけの勇気と覚悟がまだ備わっていなかった。だからわたしは気持ちを堪えて、わざと明るく振る舞った。すでに決めている自由研究を、いかにもまだ悩んでいるというように、あのひとに相談した。読書感想文の題材にする本のおすすめを聞いた。できる限り笑って、言葉の語尾を上げるようにした。すべて、あのひとのためだった。わたしのささやかな献身は、あのひとに届いていたのだろうか。

わたしの夏が終わってからも、あのひととの交流は続いた。単身赴任先から帰ってきたお父さんのお土産は、真っ先にあのひとに持っていった。以前旅行が好きだと教えてもらったから。あのひとと一緒に作った自由研究が賞をもらったときは、学校に見に来てくれた。おばあちゃんはひどく心配していたけれど、あのひとは快活に笑い飛ばした。これくらい、どうってことないって。心配だったけど、嬉しかった。

放課後に待ってくれていたあのひとにアイスを買っても

らったことがあった。何でも好きなのを選んでいいよって言ってくれたから、わたしはシェアできるものにした。アイスを差し出すと、そのひとは嬉しそうに笑った。少し寂れた駄菓子屋の店先で、今日学校であったことなんかをとりとめもなく話しても、何してもそのひとは楽しそうで、嬉しそうだった。

そうこう話しているうちに、時間はどんどん過ぎていった。目が冴えるほどの明るい夕焼けが、わたしたちに容赦なく降りそそいだ。こんなに暑いのに、暦の上ではもう秋だという。駄菓子屋の壁にかけてあるカレンダーには、赤とんぼと紅葉が描かれてあった。話したい内容をすべて話し切ったわたしは、それからぼーっとそのイラストを見ていた。あのひとも、何も言わなかった。わたしとあのひとの間には、心地よい静寂が流れていて、それが当時のわたしにはとても尊く素晴らしいものであるように感じられた。ずっと、こうしていたいと思った。

帰りの催促をしたのは、一体どちらであっただろうか。段々と暗くなっていく空に対して恐れをなしたわたしからかもしれないし、良識ある大人であるあのひとであるかもしれない。わたしはベンチから重い腰を上げて、あのひとと手を繋いで家路についた。

学校からはわたしの家のほうが近い。いつも通りのさよならの別れ際に、わたしはあのひとにもうしばらく会えなくなると告げられた。大きな病院に行くらしかった。

「もう少し頑張ってみようかな。全部あなたのおかげ」

最後にそのひとは付け加えた。今までで一番楽しい夏だった、と。その言葉にわたしがどう返したかは、もう覚えていない。たった一つだけ確かなことは、この日がわたしがあのひとの肉のついた姿を見た最後の日であることだった。

さよなら、とわたしはあのひとの骨に呟いた。葬式が終わってはじめて、わたしは泣いた。秋と呼ぶにふさわしい、少し肌寒い日のことであった。

それからずっと、わたしの夏は止まっている。

バスを下車して家に帰ると、単身赴任のお父さんから荷物が届いていた。開けるとあるブランドのお土産。あの夏、彼女が美味しいと言ったもの。個包装のお菓子を一つ取り出して、その表面をそっと撫でる。三つほどつかんで自分の部屋へと持ち帰るも、食べる気にはなれなくて、そのまま机の上へと置く。そして、ふと目に留まる一枚の写真。淡いピンク色の写真立てに入った、色あせた写真。幼いわたしとあのひとの笑顔。あの夏の産物。いつの間にか、わたしは笑っていた。

死にたくて、消えたくて、どうしようもない日に限って、あのひとは現れる。わたしに、この世界は捨てたものじゃないと思わせる、ほんとうにやさしいひと。少し寝ようと思って、ベットに身を委ねた。つんとする鼻と潤む目に気づかないふりをする。ぐしゃぐしゃになったスカートのことだって、もうどうでも良かった。

あの夏と彼女が、わたしのことをこの世界へと繋ぎ止めている。せめてあのひとの夢が見られますように、とわたしは祈った。